

2015年3月期 第1四半期 決算カンファレンスコール

(2014年7月31日実施)

代表取締役社長 山口 悟郎 スピーチ

<1. 2015年3月期 第1四半期 決算概要（前年同期比）>

まず、当第1四半期の売上高であります。前年同期に比べ0.9%増加の3,347億円となりました。

一方、利益については営業利益は前年同期比26%減少の188億円、税引前四半期純利益は11.9%減少の307億円、四半期純利益は14.1%減少の195億円となりました。

設備投資、減価償却費は前年同期比で減少しましたが、研究開発費は「電子デバイス関連事業」や「情報機器関連事業」を中心に増加しました。

なお、平均為替レートは前年同期に比べ米ドルが3円、ユーロが11円の円安となりました。この為替変動により、前年同期に比べ売上高に対し約85億円、税引前四半期純利益では約30億円の影響がありました。

<2. 2015年3月期 第1四半期 事業セグメント別売上高（前年同期比）>

次に、事業セグメント別の売上高について説明いたします。

当第1四半期は、「ファインセラミック部品関連事業」や「半導体部品関連事業」が前年同期に比べ10%を超える増収となりました。また、「情報機器関連事業」、「その他の事業」についても2桁に近い増収となりました。

一方、「ファインセラミック応用品関連事業」及び「電子デバイス関連事業」は減収となりました。

＜3. 2015年3月期 第1四半期 事業セグメント別事業利益（前年同期比）＞

事業セグメント別の利益につきましては、「ファインセラミック部品関連事業」や「電子デバイス関連事業」、並びに「情報機器関連事業」が大幅な増益となりました。しかし、「半導体部品関連事業」や「ファインセラミック応用品関連事業」、並びに「通信機器関連事業」の利益が減少し、事業利益全体では前年同期を下回りました。

＜4. 2015年3月期 第1四半期 セグメント別業績概要（前年同期比）

－ファインセラミック部品関連事業、半導体部品関連事業－>

まず、「ファインセラミック部品関連事業」です。半導体製造装置用をはじめとする各種産業機械向け部品や、カメラモジュール等の自動車向け部品の売上が伸びたことにより、当セグメントの売上高は前年同期に比べ11.4%増加の209億円となりました。

事業利益は、増収効果に加えて、原価低減を図ったことにより15.6%増益の34億円、事業利益率は16.1%となりました。

次に、下段の「半導体部品関連事業」ですが、昨年10月に子会社化した京セラサーキットソリューションズ(株)の売上貢献や、LED及び車載向けにセラミックパッケージの売上が増加したことなどにより、当セグメントの売上高は、前年同期に比べ16.9%増収の485億円となりました。

一方、事業利益は、当初計画していた一部の有機パッケージの売上が第2四半期以降にずれこんだことに加えて、価格下落の影響もあり、減益となりました。

＜5. 2015年3月期 第1四半期 セグメント別業績概要（前年同期比）

－ファインセラミック応用品関連事業、電子デバイス関連事業－>

「ファインセラミック応用品関連事業」については、減収減益となりました。「機械工具事業」の売上高は、海外の自動車関連市場向けなどを中心に増加したものの、「ソーラーエネルギー事業」の売上高は、今期は産業用大型案件が第2四半期以降に集中していることに加えてパネル価格の下落が進んだ影響により、減収となりました。

資料下段の「電子デバイス関連事業」は、前期に実施した構造改革が影響し、減収となりました。しかし、事業利益は構造改革の効果やAVX Corporationでの利益増により、セグメント全体では24.2%の大幅な増益となる77億円となり、利益率も2桁へ改善することができました。

<6. 電子デバイス関連事業の業績推移>

こちらのグラフに、前期第1四半期から当期第1四半期までの「電子デバイス関連事業」の四半期別の売上高、事業利益、事業利益率を示しています。

前期より進めてきた民生用タッチパネル事業からの撤退の影響により、セグメント全体の売上高は前期第2四半期以降、減少していますが、構造改革の効果などにより収益性は改善し、当第1四半期の利益率は、直近5四半期の中では最高となる11.6%まで改善させることができました。

<7. 2015年3月期第1四半期 セグメント別業績概要（前年同期比）>

-通信機器関連事業、情報機器関連事業->

「通信機器関連事業」の売上高は、前年同期比横ばいの385億円となりました。利益については、第1四半期に予定していた一部の海外向け新製品の販売が第2四半期に延びたことを受け、減益となりました。

続いて、資料下段の「情報機器関連事業」ですが、新製品の効果や積極的な市場開拓及び拡販活動を進めたことにより複合機の販売台数が伸び、9.6%増収の775億円となりました。

利益については、増収効果に加え基幹部品の共通化によりプラットフォーム化を進めた新製品の販売増や原価低減の効果により、25.3%増益の76億円となりました。

＜ 8. 2015年3月期第1四半期 セグメント別業績概要

(前年同期比) -その他の事業->

「その他の事業」では、京セラコミュニケーションシステムの売上高がエンジニアリング事業を中心に増加したことにより増収となったものの、研究開発費の増加等の影響により、利益はほぼ横ばいとなりました。

以上が、当第1四半期の概要です。

＜ 9. 有機基板事業の強化＞

本日、決算発表と同時に、有機基板事業の統合についてのプレスリリースを行いました。

当社は、有機基板事業の更なる強化を目的として、昨年10月にグループ入りしました京セラサーキットソリューションズ(株)と、京セラS L Cテクノロジー(株)を本年10月1日に統合し、新生、京セラサーキットソリューションズ(株)とすることを決定しました。

この両社の統合により、主に3つの効果を見込んでいます。1つ目は販売力の強化です。営業部門を一本化し、顧客への幅広い製品の提案や新規顧客開拓に努めてまいります。また、京セラS L Cテクノロジー(株)が持つ、海外の販売チャネルや顧客との信頼関係をベースにマザーボードやモジュール基板の拡販を進め、海外売上の拡大を図ります。

2つ目は開発力の強化です。両社の保有技術を相互に活用し、新製品開発のスピードアップに努めてまいります。

具体的には、京セラS L Cテクノロジー(株)が得意とするパッケージ設計技術や、薄型、微細化技術と、京セラサーキットソリューションズ(株)が有するボード設計技術や部品内蔵技術をコアに、機器の性能向上のための設計提案などを行ってまいります。

3つ目はコスト削減の推進です。部材の一括購買を進めることによる製造原価の低減や、営業拠点の集約による販売管理費の削減を図ってまいります。

これらのシナジーにより、有機基板事業の更なる収益拡大を図ってまいります。

< 10. グローバルコンセプトモデルの展開 >

通信機器関連事業では、先日au様より、当社のグローバルコンセプトモデルであるトルクが発売されました。

トルクは、米国でヒットした高い耐久性を持ったモデルです。加えて、例えば画面が濡れていても操作ができるといった確実な操作性や、当社が独自に開発したスマートソニックレシーバーといった、騒音下でもクリアな音声を伝える機能を搭載しています。

当社は、引き続き特長ある端末のグローバル展開により、販売拡大を図ってまいります。

< 11. 2015年3月期 業績予想 >

資料の11ページから13ページには、通期の業績予想を記載しております。通期業績予想につきましては、4月時点から変更はありません。

ただ今ご説明申し上げました当第1四半期の業績は、社内計画を捉えることができました。

第2四半期以降、部品事業についてはスマートフォン向けの部品需要の拡大が見込まれることから、「半導体部品関連事業」及び「電子デバイス関連事業」の売上増を図ってまいります。

また、「ソーラーエネルギー事業」につきましては、期末にかけて販売が大きく伸びる構造となっており、第2四半期以降、国内産業用を中心に確実に売上を伸ばすこと

ができると考えております。

機器事業においても、第2四半期以降の売上拡大が見込まれます。「通信機器関連事業」では、第1四半期からずれ込んだ海外向けの新製品は8月から発売されることが決定しており、また、第2四半期以降に多くの新製品を販売する計画であることから、今後の売上増を見込んでいます。さらに、新製品のタイムリーな販売、海外新規顧客の開拓により、売上拡大を目指してまいります。

「情報機器関連事業」では、製品ラインナップの拡充やソリューションビジネスの強化による売上拡大に加えて、ベトナムでの生産拡大をはじめとした原価低減により、収益性の向上を図ってまいります。

以 上